
あなたに会えたコト...

千龍風爽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたに会えたコト…

【Nコード】

N6730V

【作者名】

千龍風爽

【あらすじ】

パラレルストーリーで、新蘭だと思えます。コ哀・新志派の人はBACKしてください。

ONE

「えっ？…本当ですか!？」

ある孤児院で1人の少女が喜びの混じる驚きの声を上げた

彼女の名は毛利蘭といった

彼女は小さい頃に両親を亡くしてしまい、孤児院へとやってきた

また、孤児院の中でも1番年上のため、面倒見がとてもよく孤児院の院長も働いている職員からも信頼されている

そして、優しい心を持っており、孤児院にいる子どもからも人気がある

「ええ…貴女知ってるわよね？元大女優の工藤有希子、そして世界的に有名な推理小説家の工藤優作夫妻が貴女を引き取ってくださるらしいのよ。」

もしも貴女が承知するなら電話をして、明後日に引き取ってもらうことになるんだけど…。どうかしら…？」

院長、岡山陽子が聞く

蘭は少し迷う、自分を信頼してくれていた小さい子ども達に何も言わずに去ってしまうのはと…

「…院長先生、私、行きます。」

蘭はそれだけ言つとお辞儀をして院長室を後にした

ONE (後書き)

次回も見てくださいm()
感想等もお待ちします

by 千龍風爽

TWO

蘭が工藤邸に行く日がとうとうやってきた

玄関では荷物を持った蘭と岡山陽子院長が立っている

そして施設からは蘭との別れを悲しんでいる子ども達の声がする

1台の車が来た

工藤邸へと送る車である

「じゃあ、蘭ちゃん、行きましょう。」

有希子が蘭の荷物を持ちい

蘭は小さく「はい」というと車に乗り込んだ

「蘭さん、頑張ってたね。」

陽子の言葉に蘭は頷いた

エンジンがかかり、蘭を乗せた1台の車は工藤邸へと向かった

「…着いた、蘭ちゃん、ココよ。ココが蘭ちゃんがこれから住む家。」

有希子が笑顔で言うと、蘭は荷物を持って、車を降りる

「おっと…レディに重たいものを持たせてはおけんな。」

横から優作がやってきて、蘭の荷物を持つ

蘭は少し焦りながらもお礼を言う

蘭は工藤邸を見上げた

それもそのはず…

大きい豪邸でしか見えないのだから
そしてその隣には大きい家がもう1件

「さ、中に入りましょう。」

有希子が蘭の背中を押す

蘭は緊張しながらも家へと入っていった

〜工藤邸内〜

「うわぁ…大きいですね…。」

蘭がいい、振り向くとその場に有希子と優作の姿がなかった

蘭は恐らく買い物に行ったのだらうとか、優作の場合は書斎にこもってるのだらうと推測し、何も気にせず家の中を見回していた

「…どちら様？」

後ろから1人の男性の音がする

蘭は慌てて振り向いた

蘭は男性に目を奪われた

「…えっ、あっ、あの…私、今日からココでお世話になる毛利蘭と
います。…えっと…何ていったらいいか分からないんですけど…
とりあえず、よっ、宜しくお願いします。」

頭を下げる蘭

「…ああ…宜しくな。俺は工藤新一。まあ、自己紹介しても意味ね
えと思うけどな。」

男性、工藤新一は微笑しながらいった
蘭は首をかしげる

「俺、探偵でよく事件に呼び出されて殆ど留守にしてるんだ。」

と新一

蘭は「へえ…そうなんですか。」と感心している

そのとき…

「あら、新ちゃん、帰ってたのね、丁度良かったわ。あのね2人に話さなきゃいけないことがあるの。」

有希子の言葉に新一と蘭は目を丸くする

「何だよ、話さなきゃいけないことって。」

と新一

「実は…優作の仕事の関係でロスに行くことが決まっちゃって…新ちゃんにはこの家のことを全部任せるから。」

蘭ちゃんも、こんな男と過ごすのは苦痛かもしれないけど……」

「おい、それどついう意味だよ。」

横で新一が突っ込む

有希子はペロリと舌を出す

「と、とにかく、もう行かないと飛行機の時間に送れちゃうから……」

じゃあ、生活費とかは金庫の中に入ってるわ！！

じゃあ、2人とも一つ屋根の下で頑張ってるね。」

有希子はそそくさと出て行ってしまった

TWO（後書き）

千「うん、身勝手な親だね。」

新「いつもこんな感じだけだよ。」

千「だあ！だあ！だあ！に出てくる宝生おじさんみたい。」

新「誰？…その人。」

千「あれ？だあ！だあ！だあ！と共演「ニッポしたことあるから分かるでしょう？彷徨の父。」

新「…どーでもいいわ。次回も見てくださいね。感想等もお待ちしています。」

次回も見てください！

b y 千龍風爽

THREE

工藤夫妻がロスにわたって1日目

新一は朝、普通におきて、普通にか着替えて、普通に下へと降りて行った

「…ココ、ドコだ…？」

新一は瞬きする

キラキラ光るお城のような床、リビング、そしてご馳走といっついほどの朝食。

「あ、お早うございます。…く・くど…ん？新…？ええ…？」

蘭は挨拶をしたものの、なんと読んでいいのか分からず口籠る

「あ？呼び方に困らなくてもいいぜ。普通に自由に呼んでくれ。俺もアンタのことは、蘭って呼ぶからさ。…もしかして、名前で呼ばれるの嫌か？」

と新一

蘭は少し戸惑う

「…いついえつ、大丈夫です、好きに呼んでください。…し、新一さん。」

蘭は新一のことを名前で呼べたのが嬉しかったのか笑顔になる

「あ、そうだ、蘭は、あとで俺の隣の家に行ってくれ。挨拶する人がもう2人いんだ。飯食ったら一緒に行きこうぜ。」

新一が笑顔交じりで言うと蘭は笑顔で頷いた

「…ココですか？…大きい家ですね…。」

連れてきた場所は阿笠邸だった

「ま、俺の家には負けるけどな。知ってるか？阿笠博士って。」

新一が空を見ながら聞く

蘭は「は？」と素で聞き返す

「ま、知ってるわけねえよな。作ってるもんはガラクタばっかしだし、少し有名になりかけたけど…。」

微笑＋呆れながら言う新一に蘭はクスと笑い出した

「新一さんの周りって楽しくて面白い方ばかりなんですな。」

蘭は笑いながら言った

「ばかりって…まだ2・3人しかあってねえじゃねえか…しかも身内…。」

苦笑しながら言う新一

蘭は口に手を当てて「あ」という口をする

「あ、すみません…面白かったもので…。」

と蘭

「別にいいんだけどよ。…さっさと中はいるっぜ。」

新一が言うと蘭は返事をし、中へと入っていった

「よ、博士…ってあれ？」

新一が元気よく入っていくが…博士の姿が見当たらない

「あら…博士なら学会で昨日から留守にしてるけど？何か用かしら？平成のシャーロックホームズさん？」

白衣を羽織った1人の大人びた女性が出てきた

彼女の名は宮野志保。両親が海外へと飛ぶために知り合いの阿笠博士に志保を預け、海外へと渡っていた
しかし、外国にいる間に不運な事故にあってしまい、亡き人になってしまった

「…あら、工藤君、彼女でも出来たの？」

志保が聞く

「んなんじゃねえよ。昨日から家で暮らすことになった」

「もっ、毛利蘭です！！宜しくお願ひします！！」

蘭は頭を下げる

「誰かさんと違って礼儀正しいのね。人の家にチャイムも押さないでツカツカと上がってくる誰かさんとは…、貴方それでも平成のシャーロックホームズと言われた人なのかしら？」

因みに今の行動は不法侵入と充たされるわ。信用されてた人が不法侵入で訴えられるなん」

「わあーっ たわあーっ た！！ すいませんでした！！！」

新一は自棄になり頭を下げた

「冗談に決まってるじゃない。改めましてって名前もいってないわね、私は宮野志保。宜しくね。」

志保は手を差し伸べる

蘭も手を握り返した

THREE (後書き)

何か新一君が快斗君化してるような気が…
次回も見てくださいヾ (*´ `*)ノ

感想等も待ってますヾ (* ^ ^*)ノシ

by 千龍風爽

FOUR (前書き)

THREEの次の日です

FOUR

蘭は新一の部屋を訪れた

新一は事件の事情聴取でない

少し乱れているベッドをシワ1つないように戻す

太陽の光が丁度いい角度で当たっているのかシワを直すと新一のベッドに頭を乗せ、座り寝てしまった

「…ん…おかあ…さん…」

蘭は夢の世界へと…

「ただいま…？」

新一が帰ってきた
しかし蘭の声も何も聞こえない

新一は階段を上がり自分の部屋へと向かう

「…あ
」

新一は蘭に気付いた

「…おとうさん…」

蘭の寝言。新一は少し目を丸くしたものの小さく微笑んだ

そして新一は自分の上着を蘭にそっとかけた

幼き頃に自分の大切なものを失い、目の前の未来が真っ暗になった身寄りもない中彼女は幸せになれるように一生懸命自分の道を歩んできた

夢の中で幼き頃の思い出が蘇る

「…うっ…お母さん…」

蘭は泣いていた

「…いかないで…待って…お母さん…お父さん…ん…?」

蘭が目を覚ました

「…し・新一さんっ！…お帰りなさいっ」

蘭は慌てて起き上がり、新一に上着を返す

「…あ・ああ…ただいま…えっとさ…大丈夫？」

新一は蘭に少し心配気味で聞く

蘭は「えっ」と少し驚いた表情になるが涙が頬を伝っているのに気付いたのか慌てて涙を拭う

「やだ…見られちゃった…」

蘭は小さく笑いながら再び涙を拭う

「別に今のは見てねえよ！！」

新一はクルリと蘭との目をそらす

「…／／／」

蘭は新一に抱きついた

「どした？」

新一は振り向き、蘭を包み込むように抱きしめる

蘭は新一の胸の中に顔を埋める

新一は何も言わずに蘭の頭をそつと撫でた

蘭は小さく新一の中で泣いた

そして落ち着くと蘭は再び新一の中で眠りに着いた

新一は再び自分のベッドに寝かせると一人阿笠邸へ向かった

く阿笠邸く

「あら…博士ならまだ帰ってないけど…?」

志保が相変わらずの白衣姿で出てきた

「いや…女ってわかんねえなって思ってたさ。」

新一はソファアーにどっと音を立てて座る

志保は鼻で笑う

「…そう簡単に女心が分かっちゃってしまったら女は務まんないでしょ?」

と志保

そっぴいなながら珈琲を新一に差し出す

「いや、さっきさ、蘭がさ…」

新一はさっきの出来事を話した

「まあ、気持ちは分からなくないわ。私も蘭さんと同じ身にあつて
る人間だから。」

志保は珈琲を飲みながら言った

新一は「ああ」とおお、珈琲を飲み干した

「とりあえず、彼女の両親のことについては触れないほうがいいわ
よ。…とにかく彼女を1人にさせちゃ駄目よ？」

彼女、結構、強そうだけど心は弱い女の子みたいだから。」

「ああ…分かったよ。じゃあな。」

新一はプラプラと手を振りながら阿笠邸をあとにした

FOUR (後書き)

千「ども。」

志「あなたと話すのは久しぶりね。」

千「いえ、初めてです。」

志「どうして?」

千「話したときは灰原哀だったから。」

志「関係ないでしょ。」

千「ううん。関係ある。…ところでいくつ?」

志「高2。一応、未成年だけど親の関係で医師免許と薬剤師免許は取得。」

千「うわっ、エリート…羨ましい…」

志「別に。次回も見せてあげてね。」

by 千龍風爽

FIVE

「なあ、明日さ、どっか出かけないか？暇だしさ。」

突然、新一が言い出した

蘭は突然の誘いに目をむくする

「いいですけどいきなりどうしたんですか？柄でもないことって…」

と蘭

その言葉に苦笑する新一

「さっき、博士ん家にいったとき宮野が何か、遊園地のペア招待券もらったらしいんだけど、興味ないからっていつて俺に押し付けてきたんだ。で、明日行かないか？」

行きたくないなら宮野に強制的に返すけど？」

新一は招待券をぺらぺらしながら聞く

蘭は少し考えた

「…行きたい気持ちは山々なんですけど…でも新一さんの事件の關係もかわつてくるんじゃないかなあって少し心配になったんです。でお行きたいです。私、遊園地つて行ったことないから…どんな所なんだろう…」。

今からワクワクしちゃいます。新一さん、有難うございました。」

蘭は招待券を見て、胸を弾ましている様子

新一はその蘭の様子を見て小さく笑っていた

「あ、新一さん、今日のお夕飯はどうしますか？」

蘭が聞く

新一は少し考え「何でもいいよ」と返事を返す

蘭は少し考える

「じゃあ、今日はハンバーグにしますね！」

蘭は飛び切りの笑顔で言うと新一も笑顔に

「マジ？俺、ハンバーグ一番好きなんだよな。楽しみにしてっから
！！」

新一は蘭の頭をワシヤワシヤと撫でると書斎へと行ってしまった
蘭は「はい」と元気よく言うと新一は後姿でありながらもグツドラ
ツクの指を蘭して見せた

蘭はいつもより張り切って買い物に出かけた

FIVE (後書き)

次回も見てください〜ヾ (*´、*´)ノ
感想も待ってます〜

b y 千龍風爽

SIX

「大丈夫ですか？新一さん。」

蘭は心配そうに聞きながら氷水につけたタオルを新一の額に乗せる
新一は運悪く風邪を引いてしまった

「悪いな…トロピカルランド一緒に…行けなくて…。ゴホっ…」

再び咳き込む新一

そう本当はトロピカルランドへ行く日だった

「あっ…、大丈夫です。それより早く治ってくださいね。」

蘭は癒しの笑顔

新一は少し頬が赤くなる

それから20分ほど、新一の傍に蘭はずっとついていた

「貴方、風邪引いてるからって言う勢いで蘭さんを襲ってないわね？」

志保が来た

しかも白衣姿

今まで薬の研究でもしてるのか？という新一と蘭の考えが一致

「何で襲う必要があんだよ！！…うへっ…ごほっ…」

「そんなに興奮する必要があるかしら？それより、薬、調合してきてあげたから飲みなさい。

5日分入ってるから。…蘭さん、そろそろ昼ごはんの時間だけのご飯、作らなくて大丈夫？」

志保が言うつと蘭は「あ、今作ってきます」と慌てていい、新一の部屋を後にした

「全く…雨に粒濡れになって熱を出すって幼児じゃないんだから…最初聞いたとき思い切り呆れさしてもらったわ。

平成のシャーロックホームズさんが粒濡れになって熱を出す。馬鹿馬鹿しいって思わないの？」

志保は鼻で笑う

「ってか、平成のシャーロックホームズって都合のいいときに言うなって！」

「はいはい…病人は大人しく。」

志保は新一の言葉を聴く様子もなく新一に体温計を渡す
新一は体温計を脇にはさめ熱を測る

そして志保に体温計を渡す

「38・4 …さっきは何 だったの？」

「38 丁度」

「上がってるわね。貴方があんなに興奮したからじゃない？ま、さつさと蘭さんの優しさがこもったおかゆを食べてさつさと寝なさい。ちゃんと毒薬も飲みなさいよ。」

「…毒薬って…」

苦笑する新一をよそに志保は「じゃあね」といい出て行った
少しの汗が新一の額を通り過ぎた

SIX (後書き)

次はPart 2書こうと思います
次回も見てください。感想等も待っています

b y 千龍風爽

SEVEN (前書き)

今回志保ちゃんと蘭ちゃん中心

SEVEN

「お早うござい…寝てる…」

蘭は新一のためにおかゆを持ってきたが新一はまだ寝ているようだ
蘭は近くの台におかゆを置くと新一の額からタオルをとり、冷水に
つけて再び新一の額に乗せる

「…朝早くから熱心ね。」

「…志保さん。…でも志保さんも充分早いと思います。今、8:0
0前ですよ?」

「私は寝るのは遅いけど起きるのはなぜか早いのだ。で、経過観察。
」

経過観察という言葉に少し疑問を感じる蘭

「あの、志保さん、いつつも思うんですけど、志保さんと新一さんってどういう関係なんですか？」

「…あら、気になるの？まさか貴方工藤君に恋してる？」

小さく笑いながら言う志保に蘭は少し焦り顔になる

「いえっ、そっいうわけじゃ」

「一応、イトコ。父方の方のね。そして私は別の話になると工藤君の主治医って訳。」

「えっ…新一さん病気なんですか…」

初めて聴く言葉に蘭は目を丸くする

「病気っていうかなんて説明したら言いかわかんないんだけど私、いつつも白衣姿よね？…少なくともあなた方が私を見るときは。」

「ええ…」

「私一応、科学者と医者免許を持ってて、薬の研究してるのよ。」

工藤君はその私が開発した薬を飲んで体がちよつと…普通の病院で診てもらっても意味はない薬だったから一応私が面倒見てるのよ。」

志保の言葉に蘭は目を点にして聞いていた

志保は蘭に「これ、また新しく調合した薬って言って渡しといて。

…じゃ、私博士が帰ってきたことだし朝食の準備もしてないから帰るわね。」といい、新一の部屋を去っていった

蘭は新一を少し見つめていた

SEVEN (後書き)

次回も見てください

by 千龍風爽

EIGHT (前書き)

登場人物増えます

EIGHT

翌日、新一の熱は下がり、蘭もホツとしていた

「蘭、今日、どっか行くか？」

新一が突然聞き出し、目を丸くする蘭

「どうしたんですか、突然……」

「結局トロピカルランドいけなくなっちゃったし、付きっ切りで看病してくれたからそのお礼っつーか。」

新一は頭をかきながら言うと蘭は賛成した
そのとき

インターホンがなり、蘭は玄関へと出た

「どちら様ですか？」

蘭は扉を開けながら聞く

扉を開けた先には新一と同じ年くらいの色黒少年とポニーテールの蘭と同じくらいの女性と新一に良く似た少年と蘭に良く似た同じくらいの女性

色黒少年は「じゃますんでー」と大きい声で言いながら中へとつかつか入っていく

蘭は全く誰なのかわからず、ただその場で啞然としていた

「なっ…服部、黒羽！！何しに来てんだよ！？しかもアポなしで…」

新一は丁度玄関へと向かおうとしていた

服部〓服部平次、黒羽〓黒羽快斗は顔を見合わせてぽかんとしてる

「それより新一、いつからだよ!？」

快斗は小さく笑いながら新一の耳を引つ張り聞いた

「いでで…いつからって何だよ」

「せやから…いつから女自分の家に連れ込むようになったんやって聞いとるんじやい！」

遂には平次も新一のもう片方の耳をつかんで言い出した
一気に玄関先はドツタンバツタン

平次の連れ、遠山和葉、快斗の連れ、中森青子も呆れてその光景を見ていて、蘭は少し焦っていた

「いい加減にしてよっ（せえー）！！」

女性群の声が響き渡った

一気に当たりは静まり返り、快斗と平次は恐る恐る2人の女性の顔を見た

引き寄せている眉、キツネのような鋭い目

男性群は冷や汗をたらした

「ココは工藤君の家だよ！何やってるのよ…バ快斗！！」

青子は快斗の耳と引っ張り、耳元で叫ぶ、和葉も同じだった

蘭は「この人たち、賑やかそう」と呟きながら小さく笑っていた

NINE

「…へえ…つまり蘭ちゃんは、工藤家の養女としてこの家に引き取られたってこと？」

快斗が聞く、小さく頷く蘭

「だから勝手に恋人とか勘違いすんじゃないやねえぞ。相手だって迷惑するだろうしな。」

新一は少し恥ずかしそうに言う

「あの…お話している最中口を挟むように申し訳ないのですが、お名前を覚えていただけませんか？」

蘭は5人分の紅茶を用意しながら聞いた
4人は小さく咳払い

「じゃあ、俺から自己紹介しよっかな。俺は黒羽快斗。特技はマジック。こう見えても結構出来るほうなんだぜ！

宜しくなっ！」

快斗はマジックで赤い薔薇を出し、欄に私、自己紹介終了

蘭は少し頬を赤くしたものの笑顔でお礼をいい「よろしく」と握手した

「私は中森青子。快斗の幼馴染なんだ。あのね：蘭ちゃん、快斗はエッチなところがあるから注意したほうがいいよ。いつっも人のパンチら見て喜んでる変体だから！」

青子は耳元で愚痴るようにいう

蘭は「えっ」と驚き、一步身を引いたが1つ深呼吸し「忠告有難う」といいながら青子と握手

快斗は青子を一瞬見た、青子は小さくニマリと笑っている

快斗は意味が分からなく口パクで「は」と聞いたが青子にそっぽを向かれてしまった

「…じゃあ、次は俺やな！俺は服部平次、この工藤と同じ高校生探偵や。東と西で並び称されとるんけど断然上はこの俺や。覚えときや！」

「アンタ、バカやないん!? 工藤君のほうが上に決まっとるやん!
! アンタと工藤君の差なんてこんなにあるんやで! ?

…あ…ははは…アタシは遠山和葉! 平次の幼馴染やねん! 仲良う
してな。」

和葉は苦笑しながらも蘭に手を差し伸べる

蘭は小さく笑うと和葉の手を握った

「…私、服部君のお父さんと面識あります。1回施設で事件あつた
とき、お父さんが来てくれて…

もしも正しければ服部君のお父さんの名前、平蔵っていいません
か?」

「ああ…正解や。よく覚えとつたなあ…あんなゴツツイ親父の顔と
名前なんて。」

平次は目を丸くしながら苦笑した

「んで…今日の用件は何だよ。しかもこのデッケー荷物。俺の家に
泊まりに着たのか?」

小さく溜め息をつきながら言う新一

4人はそれぞれ顔を見合わせて小さく笑い始めた

「んだよ／＼／」

新一は間違っているとしても思ったのか頬を赤くする

「今日から工藤家に俺ら住むことにしたから！」

快斗の言葉に新一と蘭の驚きの声が外にまでこだまし、後に志保が驚いて駆けつけたのは言うまでもなかった

NINE (後書き)

次回も見てください。
感想等も待ってます、あとリクも受け付けるので…

b y 千龍風爽

平次たちが新一たちの家に住み込んでから早くも約1週間が経とうとしていた

志保も平次たちが住み込んだためか今まで以上に工藤邸によく顔を出しに来ている

相変わらず新一・平次・快斗の3人は事件に出掛けている

しかし今日は帰りが遅いようだ

青子・和葉・志保はいつものことと思ってるため優雅に珈琲を飲みながら話し合ったりしている

蘭だけは違った

心配そうに時計を見ては玄関を見に行ったりとその繰り返し

「蘭ちゃん、そんなに心配することないよ。すぐに工藤君たち帰ってくるよ。だっていつつも青子達こうやって待ちぼうけ食らってるんだから。大丈夫大丈夫!」

青子は蘭の肩を軽く叩きながら言う

蘭は小さく頷くが心配がほぐれない

「蘭ちゃん、珈琲飲んで落ち着き。」

和葉は蘭に珈琲を差し出している

蘭は小さく頷きお礼をいい、珈琲を一口飲む

志保はその様子を飲みながら見ていた

蘭は珈琲を飲み終えた後も心配そうに時計を見る

「…蘭さん、1回、落ち着くためにもお風呂に入ってきたら？私達ももう入ったから。あとは蘭さんだけなことだし。」

志保が言うと蘭は小さく頷き風呂場へと向かった

「…蘭ちゃん、何であんなに心配しちゃうのかな…」

青子が呟くように言った

和葉は少し考える

「…多分、工藤君と両親を重ね合わせているのよ。もう2度と会えないなき両親とね。」

両親は確か交通事故でなくなっていると聞いたから…」

志保が小さくいうと2人はただ黙っていた
沈黙の空気が続く

聞こえていたのはポタポタと落ちる水滴の音だけだった

「…お願いですから…いなくならないでください。」

蘭は涙目で呟いた

両親は交通事故でなくなつた

2人で少し出掛けてくるといい、笑顔で見送つたのが両親の最期の笑顔。

自分はどんな顔をして両親を見送っていたのかも思い出せない

最期の両親の姿は渋滞を追つて植物状態となつた両親の姿だけ…
自分がだだをこねていたら両親は死んでなかつたかも

蘭はそれ以来自分を責めることしか出来なくなつていたのでつた

蘭はとりあえずお風呂に入った

「早く…帰ってきてください…」

蘭がお風呂に入ってる突然慌ててる声が聞こえた

「何やって！？工藤君が犯人逮捕時にナイフで刺されたあつ！？」

突然の電話。平次からだった

新一は犯人に刺されてしまったのだ

志保と青子はとりあえず病院に駆けつける準備をし、和葉は蘭を呼びに行き蘭は急いでお風呂から上がり、着替え4人は病院へ向かった

蘭はタクシーの中で「お母さん、お父さん…」と呟いていた

TE N (後書き)

次回も見てください。

感想等も待っています

b y 千龍風爽

ELEVEN

蘭たちは病院に到着

すぐに平次たちと合流した

そして手術室へと向かう

「で、何があつてこうなつたの？」

志保は冷静を保とうとしているが少し声が高ぶったりと焦っている様子も見えた

快斗と平次はそれぞれ状況を話す

手術室前に到着

「今の工藤君の容態はどうなの？」

「とりあえずは手術室に運ばれて今手術を受けてるけど不運にも刺さってトコが急所でき、助かるか五分五分なんだって。」

深刻そうに言う快斗、蘭は絶句してその場に力が抜けたようにへたへたと座り込んだ

「蘭ちゃん!？」

座り込んだ音に和葉と青子が振り向く

蘭は顔を手で多い、小さく泣いている

「…もう…これ以上…誰も失いたくないよ…嫌だよ…」

蘭は呟く

全員は蘭のそばへと集まる

志保は蘭を包み込むように蘭を抱きしめた

流石に全員も驚いた

なぜなら今まで志保は泣いている人を癒すために抱きしめたことがなかったから

「…彼なら大丈夫。絶対に死んだりしないわよ…、それは貴女が良
く分かっているんじゃない？」

志保は耳元で囁くように言い聞かせる
蘭は小さく頷く

そのとき新一の手術を担当した執刀医らしき人物が出てきた

「工藤は！？工藤はどうなんやつ！？」

微妙に興奮して熱くなっているのか今にも執刀医の胸倉をつかみそ
うな勢いで聞く

和葉は平次に「落ち着き」といい平次を落ち着かせる

快斗と青子も執刀医を見つめる

「手術は成功しました」

「成功」

という言葉にみんなの顔が少し和らぐ

「しかし、急所に当たったためいつ容態急変してもおかしくない状
態です。我々も全力を尽くします。…お話をしたいので少しだけお
時間よろしいでしょうか？」

志保たちは小さく頷いた

医師はそれだけ言うとは何も言わずにお辞儀をして去っていった
そのあとから酸素マスクをつけ、眠っている新一がのせられてやっ
てきた

「新一さん!!」

蘭は今にも新一に抱きつく勢いで新一に駆け寄る
新一はずっと目を覚まさず眠ったまま。

「蘭さん、貴女は工藤君の傍についていてあげてくれる？他の人た
ちで工藤君の容態を聞きに行くから……」

志保が蘭のそばにきて言うと言は「はい」と小さく返事し、新一が
寝かせられているストレッチャーについていった

志保たちはその姿を見送ると新一の容態を聴きに行くためにカウン
セリングルーム向かった

ELEVEN (後書き)

さて、とりあえず新ちゃん助かりましたが…まだまだ油断できませんね

次回も見てください〜(＊、＊)ノ

感想等も待つてます〜(＊、＊)ノ

作者は英語出来ません。タイトルのスペル間違ってたら教えてください
ださいね

宜しく願いします

b y 千龍風爽

T W E L V E

新一は容態急変の心配があるため、一般病室ではなく集中治療室へと運ばれた

蘭は入ることが出来ない

窓越しから新一を見るだけ

あの手を握ったぬくもりは暫く…下手したら一生握ることが出来ないかも知れない

新一の体についている色んな配線

見てるだけでも見苦しいものだった

「…新一さん…」

新一の名前をそっと呟く

返事をしてくれるわけでもないのに…

でも呼んだら返事をしてくれるような気がしてならなかった

「私って…本当に馬鹿。…返事をしてくれるわけじゃないのに…」

無意識に零れ落ちる透明な雫^{ナミダ}

俯いていた顔をあげて再び新一に目をやった

麻酔でまだ眠っている

蘭は集中治療室前のソファーに座った

志保たちが戻ってきた

志保率いる女3人はソファーに座る

平次と快斗は集中治療室前の窓から新一を見る

そして再び女達同様ソファーに座る

「…私、飲み物、買ってきます。」

蘭は静かに言うとソファーから立ち上がり、集中治療室前を後にした

「…目、覚ましてくれる…絶対に。…お母さん、お父さん、新一さんを助けてくれる？」

これが私の一生のお願い。私はどうなってもいいの…私の命と引き換えにしてくれてもいい。

だから…助けて。」

蘭は綺麗な星空を見つめ、自分の手を握った
ゆっくりとロビーのソファーに座る

自販機で買った珈琲を飲む

「美味しくない…」

蘭は1人呟きながら、紙コップを強く握った

覚ますわ。

蘭。：貴方の大切な人はきっと、目を

一瞬、母親の声が聞こえたような気がした
蘭は立ち上がる

「…そう、だよ、聞こえる訳ないよね。」

蘭は小さく呟くだけだった

「蘭ちゃん!!」

青子がやってきた
蘭は勢いよく振り向く

青子は息が上がっていた

「どうかしたんですか？」

と蘭

青子は息が落ち着くと

「工藤君の意識が戻ったの！！」

T W E L V E (後書き)

次回も見てください
感想等も待ってます

b y 千龍風爽

THIRTEEN (前書き)

ココには普通は無理だろうと言われる描写があります。
了承していただけた方のみどうぞ。

THIRTEEN

「新一さんの意識が戻った!？」

蘭は持っていた空の紙コップを落とした

青子はうんうんと激しく首を振り、蘭の手を握り、病室へと走り向かった

集中治療室前に行くとき、丁度、執刀医が新一の診察を終えて中から出てきたところだった

執刀医は志保らにお辞儀をした後、蘭たちに気付いたのか再度、お辞儀をした

そして去っていった

「志保さん、新一さんは!？」

蘭は凄い勢いで聞いた

皆の目が丸くなるほどの勢いで。

「…もう大丈夫、でもまだ手術を終えて何時間しか経っていないから今日の面会は控えるようにって。

彼の体力も手術で相当落ちてしまってるようだしね。…まあ、時間時間が時間。

明日の診察で問題がなかったら、少しの間だけ面会が出来るでしょうって言ってたわよ。」

志保は蘭を落ち着かせながら静かにしかし喜びのこもった声で言った
蘭の顔は段々明るくなる

嬉し涙。

蘭は安心して気が抜けたのか、そのまま倒れこんで眠ってしまった

快斗らは最初は驚いて蘭の名前を呼び続けたが眠っているということが分かって小さな微笑を浮かべた

「…蘭ちゃん、新一のコト、すんげー、大切に思ってたんだな。」

小さく快斗は呟いた

丁度、集中治療室から看護師が出てきて、突然の光景に驚いていたが和葉が事情を話すと看護師は快く仮眠室を貸してくれた

「…有難う。」

蘭は寝言で呟いた

夢の中で両親が笑っているように見えたのは蘭の胸だけにしまっておく。

NEXT DAY

執刀医はもう大丈夫だろうと判断し、面会許可を出した

蘭たちは早速、羽織るものは羽織い、マスクをつけて集中治療室に入った。

新一は蘭たちを見ると小さく笑った

蘭は真っ先に新一のベッドに近づき、新一の元気な姿を見るとその場に座り込んだ

「新一さん、よかったです…もう…心…配させないでくださいっ！」

蘭は新一の眠っているベッドのシーツを皺が出来るほど強く握りながら言う

新一は突然、泣き出した蘭に慌て、どうしていいか分からなかったが、

「心配かけて悪かったな。」

と蘭のそつと、優しく頭を撫でた

その様子を平次たちは赤面してみていた。

その後、平次や快斗を始め、志保を除いた4人に冷やかされたしかし

「ココは病院よ、基本的なマナーを守りなさい！…そんなに冷やかしたいのなら、工藤君に無理をしてもらって集中治療室…いいえ、病院外で冷やかきなさい。」

と志保から説教を受けた。

しかし最後の一言には新一はかなり苦笑していた。

そして志保のお決まり言葉「冗談よ」で、締めくくった。

数日後、新一は一般病棟へ移動することが決まった

THIRTEEN (後書き)

千「意識戻ってよかったね。」

蘭「…本当に、よかった…」

新「心配させて悪かったな。」

千「同じ台詞を二度使うの禁止ね。」

新「最後の^{これ}はなんだ？」

蘭「次回も見てくださいね。」

感想・評価等も待ってます〜(*、 *)ノ

by 千龍風爽

FOURTEEN (前書き)

ゲストで蘭葉ちゃんをお借りした

FOURTEEN

新一は無事に退院した
しかし月に1回検診がある。

そして新一は久しぶりの学校へ。

平次と和葉は帝丹高校に転校しているため、一緒に登校。青子と快斗は江古田高校へ通っているため高校は別々。

高校に着くと新一をたくさん仲間が取り囲んだ、また仲間の中には新一の傷跡を突っつこうとしたものもいた。
蘭は心配そうに新一の様子を見ていた

そのとき

「蘭は工藤のコト、好きなの?」

蘭のクラスメート、九十九蘭葉が聞いた
その言葉で恋愛話が大好きな女子が群がってきた

蘭葉は人が群がっているところが嫌いなため、すぐにいなくなつた
が…

「…どうなのよっ?」

と女子生徒。

蘭は少し頬を赤らめて考えながら「…そういう意味じゃありません
けど。」と照れくさく言う

女子生徒は少しつまらなそうに「なーんだ」といいながら自分の席
に戻っていった

すると和葉が来た

「蘭ちゃん…自分の気持ちに嘘ついたらアカンで!!ポーっとしと
ると誰かにとられてまうや、狙つとるんやったら積極的にアプロー
チやアプローチ!!」

和葉の熱血さに苦笑する蘭、園子と志保も同じ顔をしている
和葉は大声で語りだしたため、クラスメートの視線を集め、赤面。

「…和は相変わらず声が大きいね。」

蘭葉は小さく微笑みながら戻り、席に着いた

「…私って、新一さんのことが好きなんじゃないか？」

蘭は志保に問いかけた

志保は「は？」と裏声を出した

「…異性。…として？」

志保は静かにマグカップをおきながら来た

蘭はコクリと頷く

「それは私には分かり知れないことよ、貴女の心の奥の気持ちを見ることが出来ないもの。

分かることは、あなたは意識してるのなら、もう貴女は工藤君を悪い言い方をすれば主人ではなくて異性：1人の男性としてみてるってコトになる。

それだけはハッキリしてて私でもいえることだわ。」

志保は再びマグカップを手に取り、飲み始めた

蘭は「そうですね…」といい、飲み物を飲んだ後、工藤邸に戻った

帰ると青子・和葉・快斗がいた

平次と新一はまだ帰ってきていないらしい

「蘭ちゃん、どうしたの？浮かない顔して。」

青子が心配そうに聞いた

「まださっきのこと気にしてるん？」

と和葉

青子は帝丹高校ではないため何のことかはさっぱり分からなかった

「さっきのことって何？」

和葉は青子に話した、青子はうーんと考える

「蘭ちゃん、これはね、恋だよ！！恋！！完璧な恋！！」

青子は蘭の手をがっしりと握りながら言った

そのとき

「何がコイ？…魚？」

と新一の声が聞こえた

快斗は思いつきり呆れる

蘭は赤面してついには「きゃーっ」と悲鳴を上げて、部屋に閉じこもってしまった

「…新一って本当に鈍感だよな。…ってかこの状況でなんで魚の鯉

が出て来んだよ、鯉の滝登りじゃねーんだから。」

「じゃあ他に何のこイがあんだよ？」

予想と外れたため、新一は少し口を尖らす

「ハートの恋があんだろ？」

快斗はニヤニヤしながら胸の前で指でハートを作った
青子に「ふざけないの！」と思いきり頭を殴られた

「…姉ちゃんに好きなのやつでも出来たんかもしれんな」

平次は少しからかいながら言う

「…別に俺には関係ねえよ！！部屋で休む！」

新一は公にいいながら自室に行ってしまった

「…まったくアイツの好きなのやつって誰なんだ？」

新一は自室で誰にも聞こえないような聞こえるか分からない声で
咳いた

新一も内心、少し気にしていたのかもしれない

FOURTEEN (後書き)

新ちゃんが自分の気持ちに気付けるか心配です(*・・・)

千「自分の気持ちにはスナオになろうね」

和「全然、説得力あらへんわ。」

青「うんうん、さっきの和葉ちゃんみたく熱血的に!!」

千「だって熱血って暑苦しいじゃん。そういうのは苦手ですもんね。」

和「アタシのコトバカにせんって!!」

青「次回も見てね」

葉「…わけも分からなく登場した私に意味はあったのか?とりあえず次回も見てあげて。」

あと、私がメインの「幼馴染」夫婦という方程式は成立するか
も宜しくお願いします。」

b y 千龍風爽

FIFTEEN

「…蘭ちゃん、ちょっといい？」

ある何人かのクラスメイトに蘭は呼び出された

「…何ですか？」

蘭は警戒心なく聞く

女子軍団は小さい溜め息1つ。

「蘭ちゃん、私達いつつも、貴女にイラついてるのよ。…何でいつも工藤君の奥さんのことをしてるのかってね。」

お弁当を届けたり、今日の夕食は何がいいのかとか学校で聞いたりさ、私達の前でそういうこと言うの止めてくれないかな？超腹立って、ぶっ飛ばしたくなるの。」

トン

1人の女子が蘭を軽く突き飛ばした、しかし力のない蘭には、弱い力でも強い力になってしまう。

「まだこれは私達の軽いほう、本気なんて全然出してない。…忠告しておくわ、今後、工藤君に奥さんのことをしたらただじゃあ、

済まさないから。」

蘭をキツと冷たい瞳で睨みつけて、蘭を1人置いて、その場を去っていった

蘭は緊張したのか、女子らが去っていくのを見ると力が抜けて、その場に座り込み、胸をなでおろした

蘭は1人、少しボケーっとなると、ゆっくり立ち上がって少し思い足取りで教室に戻った

「今日は…いつも新一さんだけにしか好きなもの聞いてないから今日は和葉ちゃんと志保さんに聞こうかな。」

蘭は椅子から立ち上がった

「あの、和葉ちゃん、と志保さん、今日の夕食は何がいいですか？」

「…アタシは別に何でもええよ！なあ、志保さん？」

「ええ…、それより工藤君の意見も聴きにいったら？」

志保は小さく笑いながら聞く
蘭は少し暗い顔をして黙った

そしてさっきの女子らのほうへと目を向ける、ニヤニヤと笑っていたが目は冷たく、「新一と話すな」と言ってるようだった

「いえ、今日は、いつも人の意見を聞いてばかりなので、たまには自分で決めます。」

蘭は小さく悲しい笑顔を見せると、自分の席へと戻って、机に伏せた和葉と志保は蘭の様子がいつもと違うのに気付き、蘭がさっき見つめていた方向へと目をやった

「原因はあれで間違いなさそうね。」

志保が静かに言つと和葉は「せやね」と小さく頷いた

「工藤君には言つた方がええんかな？」

和葉は心配そうに言う

志保も少し考えた

「…いいえ、言わないほうがいいわね、さっきの調子だと工藤君絡みっぽいから。私達で様子を見て、本当に危なくなったら工藤君に報告しましょう。」

と志保は小さい声で言った

FIFTEEN (後書き)

次回も見てください
感想いつでも待ってます♪
、
*
)

b y 千龍風爽

SIXTEEN

蘭と新一があまりまともに話さなくなって早いものでもう3日目。新一と平次は疑問をもち始めてもおかしくはなかった。

蘭に釘を刺した人物が、刺す前は全くといっていいほど蘭の机の前に遊びに来なかったが、最近では頻繁に遊びに来て、蘭を大勢で囲む

それだけなら、自分達が知らないうちに仲良くなったと推測できるが、女子群がいるときの蘭は全くといっていいほどの笑顔を見せていなかった

志保、和葉、そして鈴木園子も不審に思っていた

「……らんちゃん」

和葉が女子群の間から蘭の机に遊びに来た

蘭は小さくほっとしたような溜め息をついた。そして、いつもの笑顔に戻った

「ねえ、遠山さん、今私達が、大親友のらんちゃんと話してるの、だから邪魔しないでくれる？」

「そんなん、嫌っていうに決まっつるわ。蘭ちゃん表情見とつたら、アンタたちと話したくない顔しとる。」

それに話にアタシも入りたいし ええよね？蘭ちゃん？」

和葉が聞くと、蘭は安心したという笑みで頷いた
和葉は女子群に見せるように「よっしゃ」とガッツポーズ

女子らは舌打ちし「邪魔者が来たから行く。」とどこかへいなくなつた

とその途端、クラスから歓声が上がる。

「蘭ちゃん、大丈夫？…遠山さん、凄いね！あの最強組みを追っ払っっちゃうなんて！」

クラス中の半分以上が蘭のことを心配していた
しかし、蘭に釘を刺した女子組は帝丹高校の中で3年をこす以上の強さがあり、全校生徒は女子群を見るたびにお辞儀をして目をつけられないようにしている

そのため、蘭を助けようと思っても手が出なかったのだ

志保、園子、新一、平次が蘭の机の前へとやってきた。

しかし蘭は新一が自分の机に来たと同時に椅子から立ち上がり、廊下へ出ようとした。

新一は自分が関係していると思い、蘭の机から去り、1人、机に伏せて、何が原因か考えていた

「…新一さんとお話したいのに…なんでこんなことになっちゃったんだろう。」

私のせいだよね…私が朝とか帰ってから聞けばいいコトをみんなの目の前でいっちゃうから悪いんだ。

…院長先生さんたちに会いたいよ…。」

蘭は1人呟いた

「…あー、毛利さん、いたいたっ！ちょっとお話付き合ってえーっ」

先ほどの女子軍団登場。

「毛利さん、貴女って本当に偉いわよね、工藤君と話すなって言ったら本当に何も話さないんだもん。」

この調子で、卒業式まで頑張って…！

あ、勿論、家でも話さないようにネ」

女子は蘭の頭をワシャワシャと崩しながら、笑いながらいなくなった
蘭は、決心した

やり直すためにもう1度、施設に戻ろうと。

「でも最後に新一さんとお話したかったな。」

蘭は小さくクスッと笑って微笑みながら、出てくる涙をこらえよう
としたが出来なかった

「蘭？」

男が蘭の名前を呼んだ

「…新一さん？」

その声の主は新一だった。

蘭は新一と話すのが怖くなり、その場から立ち去ろうとした。

「…待てよ。」

新一が蘭の手をつかんだ

「えっ？」

涙目で新一のほうを振り向く蘭

新一は真剣な眼差しで蘭を見つめていた

「…何で最近、俺のこと避けてんだよ。」

新一は屋上の地面に座る

蘭は立ってる

ビュオーツ

強い風が吹いた

「…あ、白。」

新一が少し赤面しながら呟く

蘭は新一の倍以上赤面し「バカ」と新一を軽くポコポコと叩いた

「それがいつもの蘭。」

蘭の手が止まった

「…なんてな。」

新一は立ち上がって、小さく鼻で笑い、言った

「からかつのもいい加減にしてください！恥ずかしかったじゃないですか。」

「悪い。…本題、何で俺を避けてたんだ？…あの女子が原因か？」

「…実を言つと…でも私が悪いんです。家で聞けばいいものを学校で聞いたりしたから…。」

蘭は全てを話した

「…だから私、…養女をやめて、施設に帰りたかって思ったんです。多分、出来ないでしょうけど。」

苦笑しながら言つ蘭に新一は追い込まれていたと感じた

「それは例え出来たとしても俺は…蘭にいなくなってほしくねえ。」

蘭は少し赤面しながら目を丸くする

「だってよ、料理とか家事とか…」

「志保さんたちが出来るじゃないですか。」

「…だけど…」

「…冗談です、私は施設には戻りません、ココですっと暮らします。」

蘭は心からの笑顔でこういった

新一は胸をなでおろし、心のそこからホッとした

SIXTEEN (後書き)

次回も見てください

感想等も待っています

by 千龍風爽

SEVENTEEN (前書き)

また蘭葉ちゃん登場

SEVENTEEN

「え〜っ！？そんなコトがあつたの？…蘭ちゃん、大丈夫？」

青子は園子から女子の一軒を聞いたらしく、蘭のことを心配している

当の本人は夕食当番のため、台所で作業

和葉は小さく溜め息をついた

「今日はとりあえず、アタシが行って追っ払ったうちゆう感じで何とかなつたんだけど…。エスカレーターしたらもうアタシらでもどつちにもならんわ…。」

何か…あの女子達は、蘭ちゃんと工藤君が仲良しとんのが気に入らへんみたいで…。」

「…簡単に言うと、僻みとかヤキモチみたいなものね…。」

志保が冷静に補足

和葉は「そうそう」というように首を振る

「とりあえず、工藤君が加わったら、また女子軍団に目をつけられる座を得ないから、蘭は私達で守る!!」

「…あの〜。」

蘭葉が手を上げる

「えっ？」

「何で私が工藤の家にいる？…確かに蘭の席の近くだけど…」

「あっ、それは蘭も蘭葉ちゃんになついているから協力してもらおう
と思つて」

小さく笑いながら言う園子。

蘭葉は苦笑している

「…私は蘭のペットじゃないんだからなついているはやめて。」

静かに蘭葉は突っ込んだ

「と・とりあえず、蘭を皆で守り隊！結成！会長は、ココにいる皆
！」

「…会長とかあったんだ。」

蘭葉は再び静かに突っ込んだ
和葉は園子と一緒に「オーっ」と手を上げている。志保は呆れてる
反面、小さく微笑んでいた

SEVENTEEN (後書き)

さて、動き出しました

蘭葉ちゃん登場回数多いと思いますが…

次回も見てください！

b y 千龍風爽

E I G H T E E N

女子が話してる間、新一、快斗、平次の3人は新一の部屋で話していた。

新一は床に座り、快斗は寝転がり、平次は勝手に新一のベッドに座り、寝てしまった

「…新一く、へーじ、寝ちまったよ？」

「…寝かせとけ、コイツは赤ん坊と同レベルだな。」

少しの沈黙が続く中、新一は口を開いた

「なあ…黒羽、女子ってやっぱーり分からねーよな。」

新一は呟くように言う

「どうしたんだよ。新ちゃんらしくないわね。」

「…母さんの声はやめる。」

「悪いっ！でも珍しいな、新一が女子のコト考えるなんて。柄に合
ってねえな。」

「ほつとけ…。」

「どーせ、蘭ちゃんだろ？」

「…まあ…な。最近さ…」

新一は長々と現在の学校状況を話し始めた
快斗はうーんと考え始めた

「…難しいなー。まあ、そういう女子ってそこら辺にいっぱいいる
からなあ。」

現に俺も被害者だし。

青子が目、つけられちまった時期が合ってよ。まあ、青子に苦労
ってモンをかけたから、新一の気持ちは分からなくはないけ
ど。」

快斗は起き上がり、顎に手を当てながら気難しそうに言う
新一は「そっかー」と息を吐きながら言った

「…要するに工藤は姉ちゃんのコトが気になって気になってしゃーないんや。せやな？工藤。」

「…服部、いつから起きてた。」

「何や、バレバレなんか。」

「…つたりめーだ、バー口。」

暫く、こんな会話が続いていた。

「はあ…いつも疲れちゃうなあ…。あ、蘭葉ちゃ…じゃなくて蘭葉さん。」

蘭が食事準備をしていると、蘭葉が来た

「別に堅苦しいから蘭葉ちゃんでいいよ…まあ、蘭の自由だけど…。夕食準備、手伝おうと思って。」

蘭葉は欄の隣に来て、蘭の指示をもらい、準備を始めた

EIGHTEEN (後書き)

次回は蘭と蘭葉が中心になりそうです。

b y 千龍風爽

「…やっぱり…熱ある。疲れ過ぎでしょ？」

蘭葉は手伝った途端に、蘭の額に手を当てた

「…えっ？…熱、あつたんですか？」

蘭は驚いていたのか再び自分の額に手を当てた
しかし自分でも良く分からない

「あのね…少しくらい、自分の体、労りなよ？まだ微熱を少し越したかってくらいだから、まだいいけど、下手したら倒れるんだからね。ほら、さっさと自分の部屋に。」

「あ…でも、夕飯…。」

「それくらい私だって自炊できるから…何作るか教えてくれたら作るよ。」

「…今日は、生姜焼きにしようと思ってたんです。だから、そこにある、お肉と…冷蔵庫にある、お野菜と。お味噌汁はもう用意でき

てるんです。だからそっちの食器棚に……」

「分かった……、支えるから……。」

蘭葉は蘭を支え、蘭の部屋へ

「…あれ？蘭ちゃん、どないしてん？」

「…蘭、熱出した。だから、来た。…今日、蘭の代わりに私が夕飯、作って帰るから。どうせ、お邪魔してたし。…さ、蘭。」

和葉たちは立ち上がって、蘭葉の代わりに蘭を支え、蘭はベッドに入った

「ねえ…工藤の部屋ってどこ？」

蘭葉は聞くと、志保が「彼の自室」と答え、蘭葉は大体、家の構成を知っているため、小さくお礼を言うと、ツカツカと新一の部屋へと向かった

「…もしもーし。」

いつもの蘭葉の声のトーンより低い声で蘭葉は新一の部屋をノックし、反応が帰ってくる前に、豪快にドアを開けた

「どうした？…ってか、あんま、いねーぞ、反応する前に人の家の男子の部屋、豪快に開けるやつ。」

新一は目を丸くし、小さく笑った

「…だろーね、ま、それは追いとくべきさ。私、今、カンカンに怒ってるんだあーっ。オメーらになー！」

蘭が熱出して、寝込んでるんだよ、あの女子達の口トを引きずってるんじゃないのかい？」

新一は少し躊躇っているように見えた

蘭葉はそんな新一を見てさらに話を進める

「結構、きつく言われてたらしいから…何で、放っていたの？…蘭に拒否られたから？」

新一は何も言い返せず、ただ黙っていた。快斗も平次も新一を見つめている

「…ふざけんじゃねーよっ！」

蘭葉は近くにある机を蹴り飛ばした

男子全員も相当びびったのか、3人で抱き合った

蘭葉は息を切らしたように息が荒かった

「…つ・九十九…（はん）？」

全員、冷や汗をたらし、すっかり女を捨てたような蘭葉を見ていた
蘭葉は女の番長みたいに、縛った長い髪をバツバサに解き、スカートなんて気にしていなかった

「…蘭に拒否されたからってそのままにしておいたのか!?…拒否されたからって蘭は本当にアンタを拒否する女じゃないってコト分かってるんだろ!？」

蘭は、表は拒否してても、心はアンタに助けの手を差し伸べてほしかったんだよ!

何でそれに気付いてやれないんだい?アンタの目は節穴かい!？」

いつもの蘭葉ではない、その声と音に吃驚したのか、和葉、青子、園子、志保が駆けつけてきた

「何かあったん…って何なん、これ…!？」

和葉は目を丸くして驚きを隠せない様子

「…蘭葉…貴女、またやっちゃった感じ?」

微妙に呆れて聞く園子に苦笑して頷く蘭葉

「堪忍袋の緒が切れて…いつもの調子でやっちゃった。…御免ね、和、吃驚したでしょう?私の1つのくせなんだ。

男子に対して怒るときにこうやって暴走して、体も心も男って感

じになっちゃうんだ。」

蘭葉はまだ、苦笑しながら喋っている

和葉は「…は・はあ…」と十中八九呆れているように見えた

「…まあ、とりあえず…工藤、アンタのやることは、蘭に拒否されてもいいから、蘭に救いの手を差し伸べてやることさ、分かった？」

蘭葉は男に戻ったような感じで、今にも新一の胸倉をつかみそうな勢いで聞く

新一は「…ああ…」と小さく呟くように返事した

新一は落ち着くと蘭の部屋へ行き、蘭の様子を見て、何も出来ない自分を悔やみ、何も言わずに静かに蘭の部屋の扉を閉め、自分の部屋へと戻った

NINETEEN (後書き)

次回も見てください」

千「蘭葉って意外といいやつだったんだね。」

葉「意外は余計。」

千「でも蘭葉って凄い観察力って言うか、医療関係者にはなれるよね！」

葉「一応、小さい頃は看護師とかに憧れてたからね。今は芸能界入ってるけど。」

千「へえ…あ、そろそろ終わる？」

葉「そうだね、次回も見てくださいね。感想も待ってます。」

T W E N T Y

「…蘭、調子は？」

蘭葉は蘭のためのお粥を持って、蘭の部屋へ入った

蘭は眠っていた、蘭葉はお粥をベッドの傍の台において、静かに蘭への部屋を後にした

「うーん…蘭ってやっぱりまいち良く分からない子だ…。」

蘭葉は小さく呟き、推理するような手で廊下を歩いていった。

蘭はすっかり体調はよくなった。

「蘭、大丈夫？」

後日蘭葉は、工藤邸を訪れた

「…はい、大丈夫です、有難うございました。…あの、私…ら・ら・
蘭葉さんに…お礼がしたいんです。」

照れくさそうだが笑顔な蘭

「…別に、お礼なんて…いいよ。少しだけ私の好意でもあるし。」

と蘭葉

「…でも…お礼が」

「お言葉に甘えたいところだけど、特にしてほしいことも…」

「あっ！蘭葉さんって、芸能活動やってて、家事と両立できてます
？」

考える蘭葉

「…そういわれてみれば出来てない？…かもしれないけど。何で？」

うんと頷き、出来てないと答え、さらに聞く蘭葉

「じゃあ、私が家事全般！します…。」

少し口ごもっているが気持ちは大きいようだ

蘭葉は「はっ！？」と、何言っているの というように一瞬の喚声をあげた

「いいの？…私のしたことは比べ物にならないけど…。」

少しだが冷や汗をたらしている

「…はい、私、人の役に立つのが好きだから…むしろ、やらせてください！…！」

最終的に蘭は頭を下げ、その場にいる全員を驚かせた

蘭葉は戸惑ったが、最終的には「じゃあ、お願いしようかな。」といい、蘭に家事を任せることとなった

T W E N T Y (後書き)

次回も見てください

b y 千龍風爽

「らんーちゃん」

いつものごとく、女子軍団が蘭の机にやってきた

「らんらん、風邪、引いてたんだって？だいじょーぶう？…まさか、
工藤君の看病受けたとかは言わないわよね？」

女子生徒はキャツキャと笑っているが、最後は悪魔の笑みで怒った
ように聞く

蘭は、志保らから、熱出していた3日のうち1日だけ、新一が傍に
いたということを知っていたため、答えを戸惑ったが、少し躊躇っ
たように小さく頷こうとした。

「…ふーん…工藤の看病、受けたのね。…私達、貴女に行ったわよ
ね、工藤と一緒に喋るなって。」

貴女は、はいはいと頷いてたけれど…やっぱり約束破ったのね。

最っ低！！やっぱり貴女って口先だけじゃん。前から思ってたけど。…ふざけるんじゃないわよ！！」

女子は蘭の胸倉をつかむ

周りの女子生徒も驚いたのか驚きの声を上げているものもいた

「…罰を与えなくてはいけないよね？」

1人の女子生徒が仲間の女子生徒らに聞くと仲間は皆、小さく笑いながらうんうんと頷くにやりと笑う女子生徒

「…私は、罰を与える必要はないと思うけど？」

そこへ蘭葉がやってきて、蘭の胸倉をつかんでいる女子生徒の手をつかみ、離す。

「貴女は関係ないじゃん！黙っててくれない？」

女子生徒は標的は蘭から蘭葉に変えたように蘭葉の方向を向く
蘭葉は冷静で、冷たい目を女子生徒たちに向ける

「…蘭葉ナイス！」

どこからか女子生徒たちを警戒してる生徒達の声が上がった

「あんだ達は、蘭を見てて。」

女子生徒の代表は、他の女子生徒に頼み、他の女子生徒は蘭の周りを囲んだ

志保が言った

「そこまでしておいたほうが見のためだと思っけど？」

「何だつて!？」

女子生徒が振り向くと、志保、和葉、園子、平次、そして新一が立っていた

T W E N T Y - O N E (後書き)

お助けメンバー登場
次回も見てください

感想も待っています

by 千龍風爽

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6730v/>

あなたに会えたコト...

2011年11月28日08時49分発行